

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 6 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23720431

研究課題名(和文) 在米メキシコ人移民の“旅的”生活形態と送り出し社会の都市化に関する学際的取組

研究課題名(英文) The Interdisciplinary Approach for Life Styles of "Traveling" of Mexican-U.S. Migrants and Urbanization of the Sending Societies

研究代表者

牧野 冬生 (Makino, Fuyuki)

早稲田大学・アジア太平洋研究科・助教

研究者番号：50434387

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円、(間接経費) 960,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、「移民の継続的な移動を中心とした居住形態」、「一時帰省(Return Visit)に関わる移民住居建設と都市の変容」、「マイグレーション・シティ」に関する理論化と考察」という3つのテーマに関して、メキシコのハリスコ州ハロストティランにおいて、人類学的フィールドワークと、移民住居に関する建築学的調査を実施した。移民の一時帰省と送り出し社会における都市変容の関係性を検討すると共に、墨米移民の頻繁で継続的な故郷への帰省を伴う“旅的”居住観を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the three main themes, "the migrants' life styles with continuous movements involved with return visits to their hometown", "construction of the migrants' houses and transformation of the cities" and "theorization and consideration of Migration City". I carried out the anthropological fieldwork and architectural investigation about migrants' houses in Jalostotitlan, Jalisco, Mexico, and examined the relationship between the migrants' return visits and urban transformation of sending societies. I clarified the concept of "travel-like dwelling" of Mexican-U.S. Migrants that is represented by their frequent and continuous return to their hometown.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：墨米移民 一時帰省 移民の住居 居住観 地方都市 メキシコ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、研究代表者が平成 21 年にメキシコ西部・ハロストティトラン市から米国南カリフォルニアへの移民の生活形態と社会的空間構築の調査に関して、メキシコ社会人類学高等研究所の研究者と共同で実施したフィールドワークを基底として想起されたものである。

フィールドワークでは、墨米移民の頻繁かつ継続的に出身国(送出し社会)に帰省して出身国と結びつきを維持するトランスナショナルな生活形態に関して、ライフヒストリー、送出し社会と受け入れ社会の住居分布、生活範囲、越境をともなう居住パターンの分析等の基礎的な情報収集活動が展開された。その後、「移住先と祖国とのつながりを維持して生きる移民にとって、故郷に家を建てることはどういう意味をもつのか?」をテーマにラテンアメリカ研究学会で企画セッション(前述 LASA2010-TRA6871)を実施し、議論を深めてきた。

また、人類学的フィールドワーク(人文学)と建築学的住居調査(工学)を連携させた学際的アプローチについては、フィリピンの貧困地域における居住形態と住居の関係についての研究(「都市貧困地域における共同性の意識と「共通の枠組み」に関する人類学的研究」若手研究(B) 研究代表者:牧野冬生)を基礎に、国際開発学会春季大会(2010年度6月)で発表し、学際的アプローチを移民研究に応用する必要性についても検討してきた。

こうした学際的な研究活動を踏まえて、研究代表者は、本研究において移民現象と送り出し社会の都市化プロセスを主な関心として、一時帰省という特徴的な移民の生活形態の参与観察と、居住空間の建築的調査の分析から、墨米移民と地元住民の協働による独自の都市開発実践を考察した。それは、移民と地元住民がそれぞれの生活を充実させるべく動いてきた社会的文脈が、結果的にメキシコ地方都市の独自の都市拡大を招いたことを指摘することに繋がり、今まであまり議論されてこなかった地方小規模都市(送出し社会)の特徴的な都市化現象を把握することに接続できた。

現地でのフィールドワークは、上述した建築学と人類学の調査法を組み合わせた新たな学際的なアプローチを軸にした。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、墨米移民の頻繁で継続的な故郷への帰省を伴う“旅的”生活形態と移民の送り出し社会における都市変容の分析を通して、特徴的な移民の居住形態を包摂した新たな都市開発実践「マイグレーション・シティ」の実態を把握することであった。具体的には、以下の3つのテーマを設定し、

トランスナショナルな生活を基軸とする移民と、場所に定着して生活する地元住民との共存関係を、特に移民の一時帰省(Return Visit)と故郷における居住空間の構築に着目して明らかにすることを旨とするものであった。

テーマ : 移民の継続的な移動を中心とした居住形態(居住形成に関わる歴史と都市観の政治性)

トランスナショナルな墨米移民(Migrants)の生活形態は、移民の第一、第二世代においては Emigration、Immigration、Return Migration の連続した過程から語られてきたが、故郷との紐帯関係において第三世代以降の観光的要素(ツーリズム)を含む頻繁な一時帰省(Return Visit)を包摂することで、現在の特に若い世代の移民が抱える新たな“旅的”居住観の把握を試みる。

テーマ : 一時帰省(Return Visit)に関わる移民住居建設と都市の変容(場所性を基軸とした分析)

移民の海外送金は地域開発の主要な資源であり、故郷での住宅建設は移住先では実現が難しいマイホームの実現である。近年急速に増加している一時帰省の拠点としての住居建設を、地元住民の戦略的な移民マネーの誘導という側面も重視し、故郷の歴史的背景と政治性から検証する。

テーマ : 「マイグレーション・シティ」に関する理論化と考察(住民主導の開発実践の理論的考察)

移民の増加は、送出し社会の生産人口の減少を加速される一方で、送り出し社会の住居建設を促進し、都市化を加速させてきたという側面がある。送り出し社会の都市化において、雇用拡大は受け入れ社会に向けて外部化している。この「送り出し社会における雇用欠如と都市化」を、経済を外国に依存するメキシコ地方都市の特徴的な都市開発の傾向として検証する。

(2) 本研究の特色は、人類学、建築学、移民研究という3つの学問領域を組み合わせた学際的な研究アプローチである。この方法は、研究代表者がメトロマニラの住居に関する研究で構築した建築人類学(建築+人類学)と、メキシコ社会人類学高等研究所の研究員と共に実践してきたトランスナショナルな生活領域に関する研究(移民研究+人類学)を融合させることによって初めて実践することが可能となった。

本研究において予想された成果は、以下の3点であった。

観光的要素(ツーリズム)を伴う一時帰省を軸とした居住形態から抽出される“旅的”居住概念を、墨米移民に特徴的な一形態とし

て捉え、トランスナショナルな居住の新たな可能性を提示できること。

墨米移民と地元住民の間における経済的依存関係を住宅建設に関わる末端（職人集団）まで含む聞き取り調査から検証し、ポリティカルエコノミーを主導する地元有力者の都市開発戦略を実証できること。

メキシコ地方都市の固有の地域文化の中に存在する“移民の住居及び居住形態のあり方を包摂する独自の経済戦略”を検証することで、他の発展途上国の地方都市にも応用可能な新たな都市開発の枠組みを提示できること。

### 3. 研究の方法

本計画は、2011年度～2013年度の3年計画で展開した。研究は、3年間の間に「各テーマの問題意識の再検討」、「各研究課題に関するフィールド調査とワークショップ」、「研究発表と研究成果の作成」に重点を置き、遂行してきた。

#### (1)2011年度

2010年度の事前調査を踏まえた上で、研究の初年度は、フィールドワークによって「移民の継続的な移動を中心とした居住形態」、「一時帰省に関わる移民住居建設と都市の変容」、「マイグレーション・シティに関する理論化と考察」の各テーマにおける論点を整理し、問題点を抽出してきた。具体的には、研究テーマごと下記の方法により研究を進めた。

テーマ：移民の継続的な移動を中心とした居住形態

メキシコ西部・ハリスコ州ハロストティトラン市においてフィールドワークを実施した。ハロスは、グアダハラから車で2時間程度の中央高原に位置し、20世紀初頭からカリフォルニアとテキサスを中心に移民を送り出してきた伝統的な農村地域である。最も初期に移民した世代から数えると、現在は第3世代から第4世代にあたる。特に第2世代から第3世代は、故郷と移住先を頻繁に移動しながら、トランスナショナルな社会的ネットワークを維持継続しているのが特徴である。こうした現在の墨米移民に特有な居住実態を、Immigration（受け入れ社会側）、Emigration（送り出し社会側）、Return Migration（帰郷移民）に関する過去の議論を踏まえた上で、近年増加している一時帰省（Return Visit）を加えた視点から、米国の住宅（借家）、故郷の農村の住宅、故郷の都市部に建設する海外送金による住宅、の3つの住居を移動する生活スタイルとして把握することを目指した。特徴的な住居形式を成立させている要因を人類学的な分析

（(1)プライバシー、(2)安全保障、(3)帰属意識、(4)親族関係、(5)居住パターン、(6)宗教観）と共に、建築学的な調査（住居の平面/断面構成・建築材料・構造）を同時並行に行い、技術的要素まで含めた横断的調査を実施した。

テーマ：一時帰省(Return Visit)に関わる移民住居建設と都市の変容

20世紀初頭からの長い歴史を持つ墨米移民は、メキシコ農村部が都市へ変容する過程において主要な役割を果たしてきた。しかし、移民の送り出し社会の都市化と伝統的農村が維持してきた社会構造の変容に関する研究は、未だ発展途上にあるといえる。

初年度の調査では、ハロスの都市化プロセスと移民住居建設を、都市計画的視点による歴史的な植民地都市建設の分析を踏まえた上で、移民の第三世代以降に顕著に見られる観光的要素の強い一時帰省に焦点を置いた。一時帰省の強い動機となる故郷へのノスタルジアを集団としての移民を捉える基底とし、

地元住民における歴史研究の進展と過去の再評価

伝統的家屋の保存運動にみる経済活動に向けた政治性

メキシコシティから地方全体に広がりつつある建築運動（Neo Spanish Revival）の3要素が移民のノスタルジアの形成と住宅建設に与える影響を分析した。

テーマ：「マイグレーション・シティ」に関する理論化と考察

移民は移動を伴う社会的実践の中で、地理的な都市拡大の一翼を担ってきた。一方で、移民と都市に関わる研究は、主に受け入れ社会（米国）に焦点が置かれ、移民は受け入れ社会が内包する収奪や領有、不均衡を前提とした都市論の影響下で議論され、周縁化されてきた。「マイグレーション・シティ」は、農村の都市化を移民の影響による視点だけではなく、地元住民の視点から捉え直すものである。テーマ及びのフィールドワークから、移民現象がさらなる移民増加を生む循環（スパイラル）の中に、地元住民のポリティカルエコノミーとして観光的一時帰省を誘発させる戦略を見出し、発展途上国の地方都市における持続的な住民主導の開発手法として検証することを目指した。

#### (2)2012年度

2年目については、各テーマの議論を一層深化させると共に、メキシコ社会人類学高等研究所の研究者や住民、地元の郷土史家を含めて議論を実施し、相互批判的な考察の場とした。各テーマの一層の深化をはかるため、研究は以下の事項を加えて、新たな展開を目指した。

テーマ：移民の継続的な移動を中心とした居住形態

初年度のフィールドワークの結果を踏まえて、特に米国に居住する移民の側から、故郷へ向けたノスタルジア形成と居住パターンの把握に重点を置いた。受け入れ社会（米国）においては、故郷では当然享受しているはずの理想的な自己や生活から阻害されていると感じる移民は多い。その意味で、追加的なフィールドワークとしては、米国に主に居住しながら一時帰省する家族に焦点を置く必要があった。一時帰省によって自己を再定義する要素（例えば、故郷の風景・習慣・伝統・生活様式・人間関係・ジェンダー・社会的アイデンティティ）について、ハロスの親族集団を含めて個別的なインタビュー調査を実施すると共に、そうした自己を形成する雑誌等を含めたメディアについても情報収集を実施した。

テーマ：一時帰省(Return Visit)に関わる移民住居建設と都市の変容

メキシコ地方都市の歴史を考えると、ハロス郊外にかつて存在していたアシエンダ（大農場制度）は都市中心部（セントロ）開発に大きな影響を与えてきたと言って良いだろう。大農場の地主階級は、現在もハロスの有力者・知識人として都市開発に影響をもっている。その上で、米国に移民したかどうかの階級差、米国に移民して成功したかしないかといった、新たな階級差も生まれている。ハロスにおける住居建設やデザインにおいて、住居の配置、増築と改築の頻度、建設方法（業者かセルフビルド）、住宅分布について、こうした新たに生まれている階級差の視点から調査することによって、階級の歴史性と現在の新興富裕層（格差拡大）が移民住居建設に与える影響についても分析の対象とした。

テーマ：「マイグレーション・シティ」に関する理論化と考察

初年度の分析を踏まえて、観光的一時帰省を誘発させる戦略をカテゴリー化し、特に宗教的儀礼と都市開発の関係に焦点を合わせた。

聖母マリアの被昇天祭（Asunción de la Virgen）は、ハロスで開催されると同時期に受け入れ社会の移民コミュニティにおいても実施されるメキシコ人社会において重要な宗教儀礼の一つである。例えば、米国の移民コミュニティにおいては、地元から運んできた聖母マリア像の小御輿が移民の住む各住居を回り、故郷と移民の家を直接的に結びつける象徴となる。

移民の宗教観と故郷に残された家族を訪問する一時帰省、テーマで調査したノスタルジアの形成、さらに巡礼地と改築されたアシエンダを巡る新たな地元のツーリズムの関係性を網羅的に調査し、移民ではない地元

主導の地域発展の実状とその問題点から、送り出し社会の持続的な開発「マイグレーション・シティ」の可能性について考察・検討した。

(3)2013年度

3年目は研究成果の作成に重点を置くと共に、2011年度から2012年度に明らかになった課題について、補完すべき資料の収集に努めた。

特にハロス市都市計画局における集中的なインタビューを実施し、今後のハロス行政が目指している都市計画案を入手することが出来た。これまでのフィールドワークによる質的資料と、空間的な広がりや視覚的に把握できる視覚的資料を組み合わせることで、地元社会が目指す移民を取り込んだ独自の都市像についても考察の対象とした。

#### 4. 研究成果

2011年度から2013年度までの研究成果は、年度別に下記の通りである。

(1)2011年度

初年度における課題は、『移民の継続的な移動を中心とした居住形態』『一時帰省(Return Visit)に関わる移民住居建設と都市の変容』『「マイグレーション・シティ」に関する理論化と考察』の3つのテーマに関するフィールドワークと、フィールドワークに基づいたテーマの再検証を中心とした作業であった。

メキシコ社会人類学研究所北東プログラムの研究者の協力を得て、メキシコ西部・ハリスコ州ハロス市においてフィールドワークを2011年9月に実施した。現地では、8月のフェスティバルでの滞在から引き続き地元に残っていた者や、一時的に地元に戻ってきた墨米移民を中心に、第2世代から第3世代にインタビュー調査を実施することが出来た。故郷と移住先を頻りに移動しながら、トランスナショナルな社会的ネットワークを維持継続している生活形態を確認し、特に一時帰省を軸にした視点から住居増加と都市拡大の要因について詳細な参与観察を実施できた。

2011年度の具体的な実績は、5. 主な発表論文等のとおりであるが、ここでは以下の2点について指摘しておく。

2011年12月の国際開発学会での「移民のトランスナショナルな社会的ネットワーク」に関する学会発表

ここでは、ハロス市都市計画局の調査を基本として、メキシコ地方都市に特徴的な「故郷から出ていく（移民することによって都市化する）」という現象について議論した。「移動」を伴う生活スタイルは、現代の移民社会

に特有のものではなく、伝統的生活の中にあらかじめ組み込まれていた点を指摘し、その意味で、現代の「移民」と地元住民が共通の過去を共有し、ある重層した意味を住居構築に付与しつつ生活していることを明らかにした。

2011年3月の米国応用人類学会での「メキシコ地方都市の都市化」に関する学会発表ここでは、移民拡大に伴うハロストティトランの1940年以降の都市拡大の過程と1980年代以降における大量の移民住居建設に伴うセントロの急速な変容とその背景について主に報告した。特に、移民を基軸とした新たな都市開発の可能性について、住宅建設（移民+地元住民）が「地元全体」を巻き込む地場産業となっている点と、海外在住の人々に依存した開発モデルである点から、いままで都市論でほとんど触れられてこなかった発展途上国のマージナルな地方都市論について議論を行なった。

その他の成果としては、一時帰省の強い動機となる故郷へのノスタルジアを、地元住民が戦略的に利用するポリティカルエコノミーとの関係から捉えることで、都市化が必ずしも移民の影響によるのではなく、地元住民や残された家族の影響を考慮する必要性を再確認した。

また、ハロスに在住する特定の家族に着目し3世代にわたるライフヒストリーを捉えるため、下準備としてのフィールド調査と関係作りを行なった。

## (2)2012年度

2012年度における課題は、『移民の継続的な移動を中心とした居住形態』、『一時帰省に関わる移民住居建設と都市の変容』、『マイグレーション・シティに関する理論化と考察』の3テーマについて、前年度の抽出した問題点を踏まえて一層の深化をはかることにあった。

第一に、移民の継続的な移動を中心とした居住形態については、初年度のフィールドワークの結果を踏まえて、特に移民の側からのノスタルジア形成と居住形態の変容について重点的な調査を実施した。つまり、受け入れ社会において喪失している理想的な自己や生活を、一時帰省やフェスティバルの参加などによってどのように補完し、それが居住形態に変容にどのように影響しているのかという点の調査に重点を置いた。その成果については以下の2点に集約される。

理想的な自己を求める源泉が故郷にある一方で、その源泉の構築が故郷に住む住民達が戦略的に移民を呼び込む政策と関係していること。

移民の住宅に特徴的に見られるデザインが、カリフォルニアにある疑似スペイン様式、

故郷のセントロの伝統的コロニアル様式だけでなく、地元住民のアイデンティティの源泉でもあるかつての故郷の有力者であったアシエンダのデザイン（住民の間ではルスティコと呼ばれる）等が融合した複層的な表象として捉えられること。

第二に、一時帰省に関わる移民住居建設と都市の変容については、アカワレスと呼ばれるハロス郊外の一地区に存在するアシエンダの屋敷を改装した一時住居を調査した。また、セントロにある地元有力者の広大な屋敷の綿密な調査を実施した。これらの調査から、大農場の地主階級は、現在もハロスの有力者・知識人として都市開発・都市デザインの策定に一定の影響をもっていることを確認できた。

第三に、「マイグレーション・シティ」に関する理論化と考察については、観光的一時帰省を誘発させる戦略として、特に宗教的儀礼と都市開発の關係に焦点を当てた。聖母マリアの被昇天祭は、移民コミュニティと地元コミュニティにおいて実施される重要な儀礼であり、移民の宗教観が反映される。この宗教行事を通じた独自のノスタルジア形成プロセス、さらに巡礼地と改築されたアシエンダを巡る墨米移民のツーリズム形成との強い関係性を確認できた。

最後に、前年度の課題であった「マイグレーション・シティ」の理論化については、ハロスに居住する一家族に焦点を置いて聞き取り調査を実施した。3世代のパーソナルヒストリーについて、十分な聞き取り調査結果を得ることが出来た。

その過程で、「マイグレーション・シティ」という言葉自体が、本移民現象を表現する言葉として適切かどうかについて再考する必要が生じ、研究協力者と再検討を実施した。

## (3)2013年度

2013年度は、本研究の最終年度にあたり、3つの各テーマのまとめを実施した。2014年9月にハロストティトランでフィールドワークを実施し、各テーマで不足していた資料の収集を実施した。2011年度から2013年度まで、出来る限りハロストティトランにおけるフィールドワークを重視し、毎年度現地での活動時間を確保してきた。

ハロスは歴史的に20世紀初頭から米国に移民を輩出してきた移民都市であり、都市拡大の歴史の変遷を見る上では適切なケースであったが、同時に近年のグローバル化による新たな移民形態と急激な都市の変化についても確認することで出来たのは、本研究にとってとても有益な点であった。リーマンショック以後に急速に減少していた移民は、米国の経済拡幅に伴ってここ3年間で大きく回復していたといえる。その変化を、本研究期間につぶさに確認できたのは、本研究の飛躍の上で大変重要であった。

現在のトランスナショナルな移動を伴う生活は、交通手段の発展とグローバルシティの成立といった大きな人と経済の流れの中にあるが、継続的で頻繁な故郷への帰省を伴う”旅的”居住の背景を、歴史的にセントロとランチョを往復した伝統的な生活スタイルとリンクさせることで、メキシコ地方都市の特徴的な移民居住の新たな側面を提示できたといえる。

2014年3月の米国応用人類学会では、メディアと移民に関する学会発表を実施し、雑誌、テレビ、インターネット等による情報が移民の行動や意識、アイデンティティの構築にどのような影響を与えるのかについて分析し、本研究の今後の課題、学問的発展の可能性についても議論した。

今後、本研究成果をまとめた書籍の刊行を予定している。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

Makino, Fuyuki, “Migrants and Hatred: The Discourse Represented in the Media”, Paper Abstract in The Society for Applied Anthropology 74th Annual meeting 2014, 査読無, No.74, p.170, 2013年.

Makino, Fuyuki, “A Study on the Identity of Mexican Migrants and the Designs of Migrants’ Houses”, Proceedings Papers in The Society for Applied Anthropology 73th Annual meeting 2013, 査読無, No.73, p.112, 2013年.

牧野 冬生, “グローバルイゼーション下における移民送り出し社会の都市化 - 「住民を排出することで都市化する」という視点 - ”, アジア太平洋討究, 査読無, No.18, pp.221-234, 2012年.

Makino, Fuyuki, “New Aspects of the Urbanism and Housing of Mexican-US Migrants”, Proceedings Papers in The Society for Applied Anthropology 72th Annual meeting 2012, 査読無, No.72, p.126, 2012年.

Makino, Fuyuki, “The Transnational Housing Research Project -Reconsidering the Relationship Between Immigrants and Housing-”, The Faculty Journal of Komazawa Women’s University, 査読無, No.18, pp.197-213, 2011年.

牧野 冬生, “移民労働者を主体としたメキシコ地方都市の都市化に関する考察 - 住居構築の意味の重層化と、移民と地元住民の協働による都市化プロセス - ”, 国際開発学会第22回全国大会報告論文集, 査読有, 国際開発学会, pp.1-4, 2011年.

[学会発表](計5件)

Makino, Fuyuki, Session Participant, “Migrants and Hatred: The Discourse Represented in the Media”, The Society for Applied Anthropology 74th Annual meeting, Albuquerque, U.S.A., 2014/Mar/18-22.

Makino, Fuyuki, Session Participant, “A Study on the Identity of Mexican Migrants and the Designs of Migrants’ Houses”, The Society for Applied Anthropology 73th Annual meeting Natural Resource Distribution and Development in the 21st Century, Denver, U.S.A., 2013/Mar/19-23.

Makino, Fuyuki, Session Participant, “The Urbanization of a Local City in Mexico through Lifestyle and Housing of Mexican-US Migrants -New Aspects of the Urbanism in Marginal Cities of the Developing Countries-”, XXX International Congress of the Latin American Studies Association, LASA2012/ Toward a Third Century of Independence in Latin America, San Francisco, California, U.S.A., 2012/May/23-26.

Makino, Fuyuki, Session Participant, “New Aspects of the Urbanism and Housing of Mexican-US Migrants”, Bays, Boundaries, and Borders, The Society for Applied Anthropology 72th Annual meeting, 72nd Annual Meeting, Baltimore, U.S.A., 2012/Mar/27-31.

牧野 冬生, “移民労働者を主体としたメキシコ地方都市の都市化に関する考察 - 住居構築の意味の重層化と、移民と地元住民の協働による都市化プロセス - ”, 国際開発学会第22回全国大会, 名古屋大学, 2011年11月26-27日.

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

牧野冬生(Makino Fuyuki)  
早稲田大学・アジア太平洋研究科  
助教  
研究者番号：50434387